

2018年(平成30年)

第121号

(1月1日)

平安月報
The HEIAN monthly report

発行所：立正佼成会 京都教会
 発行責任者：渉外部長 田中規之
 編集委員長：渉外広報 植田恭司
 〒605-0041 京都市東山区三条東町 230
 TEL (075)762-2211 FAX (075)762-2266

今月のことば ～明るく、朗らかに～

京都教会長 佐藤益弘

謹しみて初春のお慶びを申し上げます。

さて、弊会機関誌の平成30年『佼成』1月号にあります会長先生ご法話は、「明るく、朗らかに」という題であります。前段では、「自らを灯として」とあり、後段では、「法をよりどころに」というお話をくださっています。つまり、釈尊の晩年の説法といわれる有名な「自灯明、法灯明」にふれられているお話です。

お釈迦さまは最晩年に、故郷へ向けて旅に出られ、その途中で病に伏せられたとき、「世尊亡き後に、これから私たち弟子は何を依りどころにしていけば宜しいのでしょうか」と常随の侍者・阿難尊者がお尋ねすると、次のようなお言葉をくださったと伺っています。

「自らを洲(しま)とし、自らを依りどころとして、他を依りどころとすることなく、法を洲とし、法を依りどころとして、他を依りどころとすることなかれ」という言葉が『大パリニッバーナ経』にあります。

この中にある「洲」とは、中洲の「洲」であり、水流に運ばれた土砂が堆積して河や湖や海の水面上に現れた高所のことです。インドでは大河が多く、雨期の豪雨で多量の土砂が押し流されて、たまった洲がたくさんできます。洲は、にわかに水量が増したとき、人命救助の作用をします。

この「洲」を「灯明」とも呼ばれていますが、意味は同じです。一般的に漢訳経典では「自灯明、法灯明」と呼ばれ、広く世間にも知れ渡っており、仏教徒にとって、大切な言葉です。

私が住まわせて頂いている京都のアパートでは、水道料金だけが銀行口座からの自動引き落としではなく、オーナーさんの指定口座に振り込むことになっています。請求書が偶数月になると郵便受けに入っているのですが、先月が入っておりませんでした。

これは支払わなくてもよいということか?などと自

分に都合よく考えたりしましたが、元来、根が真面目な性格ゆえ、電話をかけて請求書を再発行してもらうことになりました。

そのうち私は、今度からは請求書を封筒とか、ビニールシートに入れてくれば、広告のチラシなどに紛れず、見つけやすく、無くすこともないだろうと思っていました。

しかし、もう少し工夫してくれたらとか、配慮してくれたらと要求するのは、他を依りどころとするもので、他に努力してもらい、自分が楽をする生き方となる。傍を楽にする、他を喜ばせるという教えに基づき、自ら進んで、「自分のことは自分です」という生き方を目指すならば、従来通りに請求書のみを入れてもらい、自分が意識をもって丁寧に確認する。余計な手間をお掛けしない、自らを依りどころとする生き方になるものと気づきました。

私は、これからも引き続き、真理・法に随順しつつ、主体的で、自立した信仰生活を送らせて頂きたいと誓いを新たにさせていただきました。

法の光をいただくことで、自らも明るくなります。そして、自ら輝きを放つことにより、自他ともに朗らかに過ごせるのだと信ずるものです。本年も宜しくお願い申し上げます。

合掌



時事刻々

あけましておめでとう
 ございます。本紙を創刊し
 てから早いもので、ちよう
 ど十年が経ちました。創立
 者の願いである「人々を幸
 せにし、世の中を平和に導
 くために、共に考え、行動
 していただける方の輪を
 広げていきたい」との思い
 をもってスタートしまし
 た▼その年は子年で、ネズ
 ミにちなんで「狛ねずみ」
 が置かれてある、大國主命
 (おおくにぬしのみこと)を
 祀る大國社(だいくくしゃ)
 を紹介しました▼今年の
 干支の戌年の守護神は、大
 國主命の別名と言われる
 大己貴神(おおなむちのか
 み)です。この神を祀るの
 は、下鴨神社本殿の前庭に
 ある七つの社「言社(こと
 しゃ)」です。一年の息災
 を願ってお参りする人も
 多いでしょう▼ところで、
 小欄も百二十一回目にな
 ります。今、読み返してみ
 ると、いま一つの出来ばえ
 に汗顔の極みであります。
 しかし、今後も時事に即し
 た話題を提供し、読者のみ
 なさんが温かい気持ちに
 なっていただくよう、執筆
 していきたいと思えます。

平成30年、私たちは「勇気をもって 私らしく やってみよう」を実践して参ります。

宿直者のつどい ～お役を通して人格向上と青少年育成を確認～

12月3日、教会研修室にて宿直者のつどいが行われ、現在宿直に就いている壮年部員やこれから就く予定の青壮年部員、55名が参加しました。第1部はご供養、研修、体験発表、グループ討議、かみしめと続きました。

研修は中村教務員さんから「宿直のお役について」と題し行われ、京都独自の「つなぎ」というシステムがあることの特徴を述べられました。また、「宿直を通して自身の人格向上の大切さ、その自覚の大切さや壮年の円熟した信仰はサンガの大黒柱であり、壮年が若い人を健全に育成していくことが大切」と今後の課題を提示されました。

その後の体験発表では、自身が導かれたきっかけが宿直だったこと、他教会ではゴールデンウィークにファミリー宿直があることの紹介、宿直のお役でどこでも寝られる体にならせて頂いたなどがありました。

グループ討議では「定年になったが行くところが出来て有り難い」「他業種の方との交流が出来て有り難い」「神社参りのようにすがすがしい気持ちになれる」「仏さまが見守って下さっているように感じる」「仲間のいびきが苦になる時がある」「東門の付近に浮浪者



が寝ていた。気を付けて下さい」と討議内容の発表がありました。

かみしめでは、今回の参加者が伝道者となって教団80周年、100周年に向けてどうしていくかと布教を促されました。

第2部は会場を体育館に移し懇親会が行われ、おやじバンド「ロータス」の演奏でダンスが始まるなど大盛り上がりとなり、一体感に包まれました。



研修の様子



グループ討議



懇親会

世界の平和に向けた祈りと行動を誓う 「新宗連京滋合同懇談会」

12月5日、ANA クラウンプラザホテル京都において、新宗連京都府協議会と同滋賀県協議会のメンバーが一堂に会し、合同懇親会を開催しました。

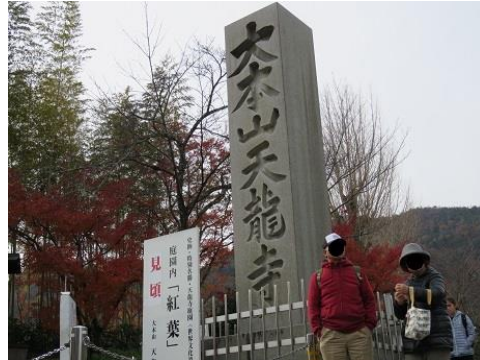
新宗連の歌の合唱、新宗連スローガンと世界平和への祈りの唱和に続き、京都府協議会の佐藤益弘議長、近畿総支部長の鉢呂神龍先生、滋賀県協議会の佐藤滋光議長のあいさつがありました。

そして、滋賀県協議会の後藤益巳事務局長による乾杯の音頭で宴席が始まりました。立正佼成会の信者さんがアンデス音楽の演奏に会場を和やかにしました。メンバー同士の親睦を深め、来年も世界の平和に向けて協力し合うことを誓い合い、京都府協議会の三嘴富和副議長のあいさつでお開きになりました。



京都明社クリーンハイキング ～有名観光地の美化に貢献～

11月26日、京都明社クリーンハイキングが嵐山で行われ、56名の参加がありました。恵まれた晴天のもと、トロッコ嵯峨駅に集合後、各地区明社で班を編成し、嵐電嵯峨駅→嵐電嵐山駅→渡月橋北詰→時雨殿→天龍寺→野々宮神社→竹の路を通り、亀山公園までの約1時間ゴミを拾いながら歩きました。全国的にも有名な場所のため、多くの観光客で賑わっており、道中は英語や中国語など様々な言語が聞かれました。



ニコニコキッズお楽しみ会 ～ユニセフ食街頭募金で呼びかけ～

12月10日、「少年部ニコニコキッズお楽しみ会」として、午後から動物園前で「ユニセフ食募金」に立ちました。0歳児を含む幼児9名と、少年部員7名、学生部2名と、支部の少年育成責任者さんが協力して、動物園前の交差点で2ヶ所に別れて1時間ほど活動させて頂きました。暖かな陽射しの中、冷たい風も吹かず、大きな声をみずから発して、市民の方に呼びかけ、入れてくれた方々にも深くとお辞儀をして「ありがとうございます！」と、お礼を揃って言う子どもたちの姿に、大人も押されて心地よい達成感を味わいました。短い時間でしたが、11,693円のご協力を頂きました。

教会に戻ってからは、温かいにゅうめんをみんなで食べ、当てものをして楽しみました。当たったおもちゃをお友達と交換したり、一緒に遊んだりして楽しみ

ました。年間最後の少年部活動は、集まって楽しむだけでなく、菩薩行も出来た1日でした。



日常生活の中の仏教用語 ～えっ？こんな言葉も仏教が語源？～

今年から始まる新コーナー。言葉のルーツを知って仏教に親しみをもちましょう。

【大袈裟（おおげさ）】

僧侶の衣服を袈裟という。もとは捨てられた布を拾い集めてつくった仏教僧の標識としての衣であった。それが中国を経て日本に伝わるうちに、現在のような、衣の上にかける装飾の形になった。

しかし、左の肩から右わき下にかける着方は変わら

なかった。これが片方の肩から斜めに物をかける「袈裟掛け」の語源。「袈裟斬り」も同じで、斜めに斬り下ろすことをいう。「大袈裟」は袈裟斬りを大きくしたことで、転じて物事を誇張して表現することになった。

（「仏教早わかり百科～主婦と生活社～」から抜粋）

記事募集のお知らせ

読者のみなさんから記事や写真・絵を募集します。年齢、性別は問いません。教会までお送り下さい。

- おせち料理、雪だるまの写真
- お正月の思い出

宗教から見た平和『現代世界と平和』～庭野開祖の法話より～

庭野開祖の「世界平和」についての法話は30年以上前に説かれたものですが、今の時代でも通用するものだと感じさせられることばかりです。昨今の日本を取り巻く国際環境も、国内における国民の意識や政治状況は、庭野開祖がそれらを見越してきたのかと思われるところが多くあります。今回も、そうした「世界平和」に向けて取り組むべき方向について見ていきたいと思ひます。

(編集部)

◆平和への道(1)

今、世界は政治・経済・文化、あらゆる面において協調しなければならないときにきています。公害の問題についても、資源の問題についても、また、人口や食糧の問題についても、一国の問題だけですまされなくなっていることはご承知のとおりです。世界各国が、人類共通の一体感に立って考え、行動しなければ、地球そのものの存在も危うくなってきている状態です。

ここで、今一度、平和友好の中でしか、日本は生きていけないということを、私たちは自覚すべきだと思ひます。すでにご承知のとおり、日本はその資源のほとんどを海外に依存しているのですから、もう、世界中の国々と仲良くして資源を調達していかなければ、どうにもならない立場の国なのです。ですから、世界の平和という問題は、たんに理想とか、原爆の唯一の被爆国だからとか、平和憲法の建前上といった理由からのみではなく、まったく死活の問題であって、日本が生きていく上に不可欠の条件とも言えるものなのです。

去る五月(註:1975年)、普門館において全国幹部大会が開かれましたが、おかげさまで幹部の皆さんの熱気が充満したすばらしい大会になりました。その同じ月に同じ場所で世界石油会議が開かれたことは、みなさんよくご存じのことと思ひます。石油というものは、今日、人類が生活していく上で欠かすことのできない大事なエネルギーとなっています。かと言って、真の人間生活はそうした外的エネルギーだけで幸福になれるものではありません。心と物の調和こそ肝心だと言われますが、外的エネルギーを議論する世界石油会議と、人間の内なるエネルギーである信仰——それ

をさらに広めようと誓願する全国幹部大会とが続けて開かれたことに、私は因縁を感じるのであります。この人間の外なるエネルギーと内なるエネルギーとが相まってこそ、人類は真にバランスのとれた生活、幸福を享受することができるのです。

物資が豊富であるということ自体は、けっして悪いことではありません。しかし地球上のその資源は有限のものであるということが、今、はっきりとわかってきました。その限りある資源を少しでも長く保たせ、有効に消費する生活設計の立て直しの時が訪れたのです。したがって、戦後わずか25年の間に成し遂げた経済成長のように、自国だけの豊かさを追い求めることは許されなくなっています。

今、もしも石油の輸入が止まってしまったら、我が国は先進工業国から一気に最低の後進国に成り下がってしまうことでしょう。日本が世界に伍して生きる道は、われわれ日本人が世界の人達に奉仕する心を持ち、その行動を起こすことです。奉仕といっても、めんどろなことはありません。共存共栄のこの地球全体のために、それぞれが持っているものを出し合って尽くしていくことです。そうしてこそ、世界に平和がもたらされるのです。

世界平和といっても、それはけっして“よそごと”ではありません。私達の一日一日の生活が世界平和に結びついた実践行動であるのですから、発想の仕方や考え方の質を変えていけばいいのです、日本という国が、どんな使命を持ち、その国民である私達はどのような責任を担っているのか——そこまで徹底して考えていって、初めて世界人としての、地球上の人類の一員としての共存共栄の道筋のありかが、明らかになってくるのであります。

(つづく)

1～2月の主な教会行事

1月1日(祝)	6:30～	元旦参り
4日(木)	9:00～	開祖さまご命日
7日(日)	9:00～	御親教
10日(水)	9:00～	脇祖さまご命日
15日(月)	9:00～	釈迦牟尼仏ご命日
21日～28日	6:00～	寒中読誦修行
2月1日(木)	9:00～	朔日参り
3日(土)	9:00～	節分会
4日(日)	9:00～	開祖さまご命日
10日(土)	9:00～	脇祖さまご命日
15日(木)	9:00～	涅槃会・釈迦牟尼仏ご命日

●メッセージ

2017年は1月に米国のトランプ大統領が誕生。世界は米国に振り回されたような1年でした。超大国が自国優先主義の考えで行動されると影響力が大きいのです。今、世界は日本の言動を見えていますね。米国に追従して来た日本がこれからもそうするのか、米国に物申すのか、難しい判断が必要です。自分がどうあるべきか、思い出されるのは「自燈明・法燈明」の教えです。「他を依りどころとせず、自分を依りどころとせよ。その自分は法を依りどころとせよ」でした。日本にしか出来ない「戦争放棄」を、世界は待っているのかもしれない。今年はその結果を示したいものです。